

第1回安曇野市まち・ひと・しごと創生総合戦略有識者会議 会議概要

1	審議会名	第1回安曇野市まち・ひと・しごと創生総合戦略有識者会議
2	日 時	平成27年7月2日 午前10時30分から正午まで
3	会 場	安曇野市役所301会議室
4	出席者	木村委員、田村委員、松岡委員、川崎委員、馬場委員、石曾根委員、宮島委員、 浅川委員、伊藤委員、廣瀬委員、浅川委員
5	市側出席者	宮澤市長、小林政策部長、関政策経営課長、小林係長、鈴木主査
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人	0人 記者 3人
8	会議概要作成年月日	平成27年8月6日

協 議 事 項 等

次第

- 1 開会
- 2 委嘱状交付
- 3 市長あいさつ
- 4 自己紹介
- 5 会長、副会長選出
- 6 協議
 - (1) 地方版人口ビジョン・地方版総合戦略の策定について
 - (2) 安曇野市の取り組み状況について
 - (3) 意見交換 テーマ 「安心して出産し子育てできるまちをつくるー安曇野市の出生率を向上させるためにはー
- 7 その他
- 8 閉会

会議概要

- 1 開会（政策部長）
- 2 委嘱状交付
各委員に委嘱状を交付
- 3 市長あいさつ（宮澤市長）
- 4 自己紹介
- 5 会長、副会長の選出（10：50）
会長に木村委員、副会長に田村委員を選出
- 6 協議
 - (1) 地方版人口ビジョン・地方版総合戦略の策定について
事務局より資料1、2、3及び4を説明（委員より質問意見なし）
 - (2) 安曇野市の取り組みについて
事務局より資料6を説明（以下質疑応答）
 （委員）出生率の推移で塩尻市の出生率が上昇しているが理由は分かるか。
 （事務局）施策を特定することはできない。市全体の取り組みの中で複数の施策の効果かと思われる。
 - (3) 意見交換「安心して出産し子育てできるまちをつくるー安曇野市の出生率を向上させるにはー」をテーマとして意見交換
 （委員）婚活パーティーとか企画すると結構人が集まる。だから、まずは結婚の機会をつくる必要があるのではないか。
 （会長）全国的な傾向として結婚しない人が多くなっている。そこで自治体も婚活とか結婚について取組んでもらいたいということか。

- (委員) 自営業の人は出会いが少なく、新たな人と知り合う機会が難しい。
- (会長) 経済的に苦しくてなかなか結婚できないという話も聞くがどうか。
- (委員) 早い人は結構早く結婚するが、30代40代になると出会いがないということを知る。この場合、経済的な問題とは別だと思う。専業農家だと経済的な面もあるかもしれないが、一番は出会いだと思う。
- (会長) 子どもを産み育てていく環境という面ではどうか。
- (委員) まず、お母さんたちが忙しいということがある。将来、家庭をもって子育てをしながら仕事をして、それでも笑顔で暮らせるというイメージがもてない。こういうところが女性の晩婚化とか子どもの数が少ないというところに結びついているのではないかと。2人以上の子どもを育てるのは大変というイメージもある。また、女性、母親が仕事や家庭のことで疲れていて体ができていないとも聞く。妊娠を維持するだけの力が体がない、子育ての大変さについていけない、流産する人も増えていると聞く。そこで、健康とか、食に関する施策をしていったほうがいいのではないかと。もし、安曇野市が食や健康に対してものすごく手厚く、この市に行けば安心して暮らせる、健康でいられるというイメージがあれば、自然とほかの市町村から子育て世代が集まってきて、永住化に繋がるのではないかと。また、お母さんたちは出産子育てをすると、いったん家庭に入るなどで、社会とのつながりが薄くなる。そこで、今、堀金のお母さんたちが中心となり、「赤ちゃん先生プロジェクト」という取り組みをしている。神戸のNPO法人がやり始めたプロジェクトだが、赤ちゃん自体に先生になってもらって、お母さんは赤ちゃんに付く講師として、学校や高齢者施設に行き、実際に触れ合っている。赤ちゃんに触れ合うことにより、子どもたちは、自分もこうやって産まれたんだという自己肯定感になり、どうやって育てていくかという関心もわいてきて、効果がある。
- (会長) 若い女性は、必ずしも子供をそれほど産みたいとは思っていないのに、周りがプレッシャーをかけているというのがあるのではないかと。また、安心して産め、育てられるという環境をつくっても、18歳になると出て行って戻ってこない。それを延々と繰り返したって仕方がない。ただ産めばよいという話ではないような気がするがどうか。
- (委員) 当社では、約3分の1、100人程度の従業員が市外からきている。しかし、定年退職した後、ここに根付かない。30年、40年働きながら、根付く人というのは非常に少ない。理由として、安曇野市は便利になっているが、生活の質が向上したという考えがもてないということがある。市そのものをもっと生活環境という前提から作っていかないと、何をやっても意味がないのではないかと。また、企業からの視点でいうと、安曇野市が企業を誘致して、雇用が発生し、市の経済がある程度活性化したとしてもそのお金が生活の質の高い環境づくりに向いていないと感じる。そうすると、それは更なる企業誘致につながっていかないと。現象的なことよりも、安曇野市を本当に良くしようとしたら、どういう方向で行くかということ議論していただきたい。まず出生率よりも、外部から入って来た人に、ここで生活できるような環境づくりをどうやってしていくかということだと思ふ。
- (委員) 2000年前後のデジタル化、IT化、こういう技術革新が雇用の問題や構造を変えた気がする。安曇野市は、つい数年前までは長野県トップの生産だったということだったが、付加価値の点から見ると、製造業の6割7割は加工品稼いで、そういう産業構造がデジタル化により崩れた。人材派遣の人の人口の流入・流出は、景気に左右され、安曇野市に定着させるということが欠けていると感じる。安心して子育てにという話があるが、大きな問題は、生活の質という問題と、18歳を契機に東京とかに行ってしまう、やはりこの2つの切り口で分析して手を打たないと、根が深いと思う。また、女性だけに期待してこの問題解決するのではなく、配慮しながら議論して進めることが必要ではないかと思ふ。

- (委員) 市外から、引っ越ししたりして思うのは、まず子供を育てているとき、安曇野市は医療費が無料で大変助かった記憶がある。また、数年前にある計画の策定委員も務めた際、安曇野市の6割の人間は、安曇野市以外で働いているというデータを資料で見た。安曇野市に居を構えて、外で働いて戻ってくるということからすると、安曇野市に魅力がないとか、住むのに適していないとかそういう意識はないと思う。また、安曇野マラソンで、約5千人の人が安曇野市に来たが、参加者のインタビューでは安曇野市は水田がきれい、水がきれい、川がきれい、山がきれい、ほとんどがそのコメントだった。その点からも、決して安曇野市は、他にひけをとっているような状況ではないと感じる。
- (委員) 大学で、18歳以上の学生をたくさん見ているが、安曇野に魅力がないから東京に出るのではなく、単純にあの年頃の人たちは東京に興味があって、東京で一度は働きたいというのがあるという印象を持っている。安曇野は良くないとか長野県が嫌だから出ていくのではないと思う。実際に松本とか、近郊の学生は、安曇野から松本まで通ってくるという学生も多くなっているの、この辺りに仕事があれば、住む場所は安曇野を選ぶという人も多くなってくるんじゃないか。
- (会長) 行政区分に区切られた安曇野市・松本市・塩尻市といったその単位だけで考えると、限界がある。もう少し広域で考える必要もある。また、子どもを増やすことがポイントではなく、10代後半から20代前半の年代で、1,000人出て行って300人しか戻ってこないということが問題。ここを変えない限りダメなので、日本全国の自治体がお互い取り合いをするのではなくて、ここで生まれ育った若者が、ここに戻ってくるということの本筋にしないと多分ダメだと思う。地方創生本部の施策に乗ってやっていると、高齢者の受け入れ先になっていくので、政策的によく考えないと危ないと思う。若い人間が地元に着いて、ずっとここで暮らしていけるというのが大事。なかなか仕事がないという話もあるが、ここで生まれ育った人がここで残っていけるという施策が起点になると思う。
- (委員) 東京から地方、他のところから安曇野市に入れるというよりは、ここで生まれ育った方々に、住んでもらうことの方が重要。都会から来た人は、地域付き合いなど田舎の生活習慣になかなかなじめないといったこともあると思う。よって、外から入れる部分というのはなかなか厳しいのではないかと。また、企業の立場から言うと、南信はリニア、北信は新幹線があるが、安曇野市は今陸の孤島になってきている。できれば、上田の方に道を通してもらえればと思っている。このなかで生活できる基盤、産業構造をきっちりしていくのも一つではないかと考えている。
- (委員) 安曇野に問題があって、東京に出ているとしたら、その問題を解決すれば安曇野に定着する数が増えることになると思うが、特に問題がなくても東京に行く人が、特に18歳から22歳の若者については多い。そうすると、安曇野に定着する人を増やすというのは確かに大事だが、そこだけでは難しく、同時にやはり出生率の問題というのは考えていかなくてはいけないと思う。たとえ安曇野市から移ってしまったとしても、日本全体から見れば人口増に貢献しているわけで、一つの効果があったといっただけで、定着だけではなくて、出生率もやはり重要である。
- (委員) 今回の会議に先立って、周囲に話を聞いたが、結婚している人は、子供は複数人ほしいと思っている。一方で、独身者もいるということで、世の中独りで暮らして生きていくにも、何も困らない世の中になってきていて、そこは嘆いても仕方のないことなので、要は複数子供をほしいと思っているのに踏みきれない人、そこをどう支援していくのかにヒントがあるのではないかと感じている。また、安曇野市の出生率が1.47で、ほかには、須坂市、飯山市、千曲市当たりも出生率が低い。気が付いた点として、須坂市と千曲市は長野市に隣接、安曇野市は松本市の隣接とベッドタウン的なところが低い傾向があるのかもしれないと感じた。通勤時間が長いとか、そういうところで負担がかかって子供を産みにくいとかそういうのがあるのかな

と。一時的にお金をやっても、将来のこと考えて踏み切れない。働き続けるためには、子供が病気になったときの手当とか、放課後の手当とか、その辺が非常に問題だとそんな話があった。もっと大きく言えば、産業、働き続ける環境、そんなところがポイントになるのではないかと。

(会長) 出生だけを考えてもだめだし、定着だけを考えてもだめだし、目標として出ているこういう項目をバランスよくやっていかないとだめなのかなという話の流れになってきた。他はいかがか。

(委員) 定着の面でいうと、僕は地元で育って、学生時代は出たが、安曇野が好きで戻ってきたというのもあるので、郷土愛とか、地元が好きとか、そういうところを感じるような教育も必要ではないかと思う。安曇野が好きな人がどんどん増えていけば、社会人になっても戻ってくるのではないかと思う。子育ての部分でも、周囲の人に色々話を聞いたが、今も実際にやっている支援という部分では、検診や、勉強会等を常に開いてくれており満足していると聞いた。また、そういう教室がたくさんあることで、安心して子育てができていくという風にも聞いた。教室などで、ママ友ができて、楽しい子育てになっていけば、二人目三人目が増えていくのではないかと。また、会社の育休がもっと制度的にしっかりと取れていけば、旦那さんが子育てにも支援できて、お母さんがストレスを感じずに子育てができて、二人目、三人目も、となっていくのではないかと。

(委員) 市では、安曇野の地場産業というものをどのように考えているか。

(事務局) 地場産業という観点からいうと、特に農業生産だと考える。米、りんご、わさび、それぞれ特筆した果樹や野菜いろいろある。そういうものを使いながら、6次産業的なものを考えていく、農業生産物を使った加工等を増やしていくとか、変わった製品を増やしていくなどのことが考えられると思う。

7 その他

次回日程確認

8 閉会

<終了 12:00>

以上